対人ストレス反応尺度の信頼性と妥当性の検討

○高橋 幸子

(筑波大学大学院人間総合科学研究科)

キーワード：対人ストレス，信頼性，妥当性

Reliability and validity of the Interpersonal Stress Response Scale

Sachiko TAKAHASHI

(Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba)

Key Words: Interpersonal stress response, reliability, validity

目 的

本研究は，対人ストレス過程で生じる否定的感情(以下対人ストレス反応)を測定する尺度の，信頼性および妥当性の検討を目的とする。

対人ストレス研究では，対人ストレス反応の種類を理論的，実証的に抽出してきた。例えば対人ストレスの定義において，緊張，不快(加藤，2000)，混乱，不安，葛藤(Lundgren, 1978)，怒り(Robbins, Meyersburg, & Tanck, 1974)が理論的に導出された。実証的検討では，加藤(2007)が抽出した「対人ストレス状況を喚起させた相手に対する情動」3 因子のうち，嫌悪・軽蔑，劣等・羞恥が対人ストレス反応と捉えられる。

一方，高橋(2008)は，大学生218名を対象とした質問紙調査から，対人ストレス反応を測定する尺度を作成している。同研究は，対人ストレスによる否定的感情反応として，悲しみ・不安，動揺・恐れ，怒り・嫌悪の3 因子を抽出し，尺度の信頼性を確認している($\alpha = .86 \sim .91$)。3 因子は，対人ストレス過程で生じる否定的感情であり，いずれも対人ストレス反応と捉えられる。そこで，従来の知見を高橋(2008)に基づき整理すると，対人ストレス反応は，怒り・嫌悪を中心とする対人ストレス状況を喚起させた相手への感情と，悲しみ・不安を中心とする対人ストレス状況を喚起させた自分への感情と，動揺・恐れ，混乱，葛藤を中心とする意識を向ける対象が不確定な感情とに大別できる。

もし，対人ストレス反応尺度によって3 反応を測定できれば，対人ストレスへの適切な対処を講じやすくなると考えられる。例えば，対人ストレスと関連の強い反応が明らかになれば，対人ストレスごとに効果的な対処を示すことが可能になる。しかし，対人ストレス反応を測定する尺度は高橋(2008)のみであり，同尺度は妥当性の検討がなされていない。

そこで本研究は，高橋(2008)の対人ストレス反応尺度について，基準関連妥当性，因子の妥当性，内的整合性の検討を行う。

方 法

調査協力者と手続き 専門学校生152名。有効回答数128名(男性41名，女性87名)，平均年齢は19.3歳($SD = 1.11$)であった。2009年11月に，個別自記入形式の質問紙法で集団実施した。

質問紙の構成 1. **対人ストレス者の経験** 「対人関係で悩んだり困ったりしたと感じたこと」の経験量について，「1. かなりある」～「5. まったくない」の5件法による回答を求めた。2. **対人ストレスの相手** 上記1のうち，最も印象に残る対人ストレス者の相手について，「1. 親」「2. 大学の友人」「3. 恋人」「4. バイト先の人」「5. 小中高時代の友人」「6. 兄弟姉妹」「7. 知り合いの人」「8. 見知らぬ人」「9. その他」に対する多重回答を求めた。3. **対人ストレス者尺度** 最も印象に残る対人ストレス者の種類を確認するため，高橋(2008)の対人ストレス者尺度25項目を用いた。被拒否，関係理解不能，被攻撃，加害の4因子で構成される。各項目について，「1. 全くあてはまらない」～「5. 非常にあてはまる」の5件法による回答を求めた。4. **対人ストレス感情尺度** 最も印象に残る対人ストレス者で経験した対人ストレス反応を測定するため，高橋(2008)の対人ストレス反応尺度22項目を用いた。悲しみ・不安，怒り・嫌悪，動揺・恐れ，の3因子で構成される。各項目について，「1. 全くあてはまらない」～「7. 非常にあてはまる」の7件法による回答を求めた。5. **多面的感情状態尺度** 妥当性検討のため，寺崎・岸本・古賀(1992)の尺度のうち，驚愕，敵意，悲しみの3因子15項目について，上記4と同様の7件法による回答を求めた。

結 果

基準関連妥当性を検討するため，対人ストレス反応尺度と寺崎ら(1992)との相関係数，対人ストレス反応尺度の該当変数以外を統制変数(2変数)とした偏相関係数，該当変数以外をすべて統制変数(4変数)とした偏相関係数を算出した(Table1)。

本研究の悲しみ・不安は，寺崎ら(1992)の敵意と負の偏相関，悲しみと正の偏相関を示した。怒り・嫌悪は，寺崎ら(1992)の敵意と正の偏相関，悲しみと負の偏相関を示した。動揺・恐れは，寺崎ら(1992)の驚愕と有意な正の偏相関を示した。 α 係数は，悲しみ・不安.88，怒り・嫌悪.91，動揺・恐れ.83であった。

因子の妥当性を検討するため，欠損値のない117名(男性36名・女性81名)について確認的因子分析を行った。その結果，適合度指標は $GFI = .721$ ， $AGFI = .657$ ， $RMSEA = .108$ であった。測定係数は.47～.86，因子間相関は，悲しみ・不安と怒り・嫌悪で $r = -.03$ ，怒り・嫌悪と動揺・恐れで $r = .22$ ，悲しみ・不安と動揺・恐れで $r = .66$ であった。

Table1 本研究と寺崎ら(1992)との相関・偏相関

	驚愕	敵意	悲しみ
相関係数			
悲しみ・不安	.423 ***	-.024	.825 ***
怒り・嫌悪	.199 *	.719 ***	.009
動揺・恐れ	.699 ***	.320 ***	.643 ***
偏相関係数(統制2)			
悲しみ・不安	.064	-.247 **	.728 ***
怒り・嫌悪	.065	.686 ***	-.142 ***
動揺・恐れ	.568 ***	.319 **	.290 **
偏相関係数(統制4)			
悲しみ・不安	.002	-.262 **	.727 ***
怒り・嫌悪	-.077	.693 ***	-.186 *
動揺・恐れ	.489 ***	.139	.155

注) *** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$

考 察

基準関連妥当性の検討では，基準変数との有意な偏相関が認められたことから，対人ストレス反応尺度の十分な基準関連妥当性が確認されたと判断される。信頼性分析の結果では，すべての因子の α 係数が.80以上であったことから，尺度の十分な内的整合性が確認されたと判断される。しかし，確認的因子分析では十分な適合度指標が示されなかった。標本数の影響と考えられることから，今後は追加データによる検討などが必要と考えられる。

引用文献

- 加藤 司(2000). 大学生用対人ストレスコーピング尺度の作成 教育心理学研究, 48, 225-234.
加藤 司(2001). 対人ストレス過程の検証 教育心理学研究, 49, 295-304.
加藤 司(2007). 対人ストレス状況における認知的評価，コーピング，情動の関連性について 健康心理学研究, 20, 18-29.
Lundgren, D. C.(1978). Public esteem, self-esteem, and interpersonal stress. *Social Psychology*, 41, 68-73.
Robbins, P. R., Meyersburg, H. A., & Tanck, R. H. (1974). Interpersonal stress and physical complaints. *Journal of Personality Assessment*, 38, 578-585.
高橋幸子(2008). 対人ストレスにおける否定的感情反応の質的違いとその影響 日本心理学会 第72回大会発表論文集, 107.
寺崎正治・岸本 陽一・古賀 愛人 (1992). 多面的感情状態尺度の作成 心理学研究, 62, 350-356.